

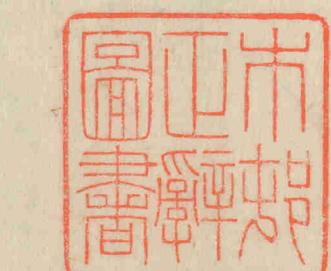
八丈鴻筆記全

1000
91
1

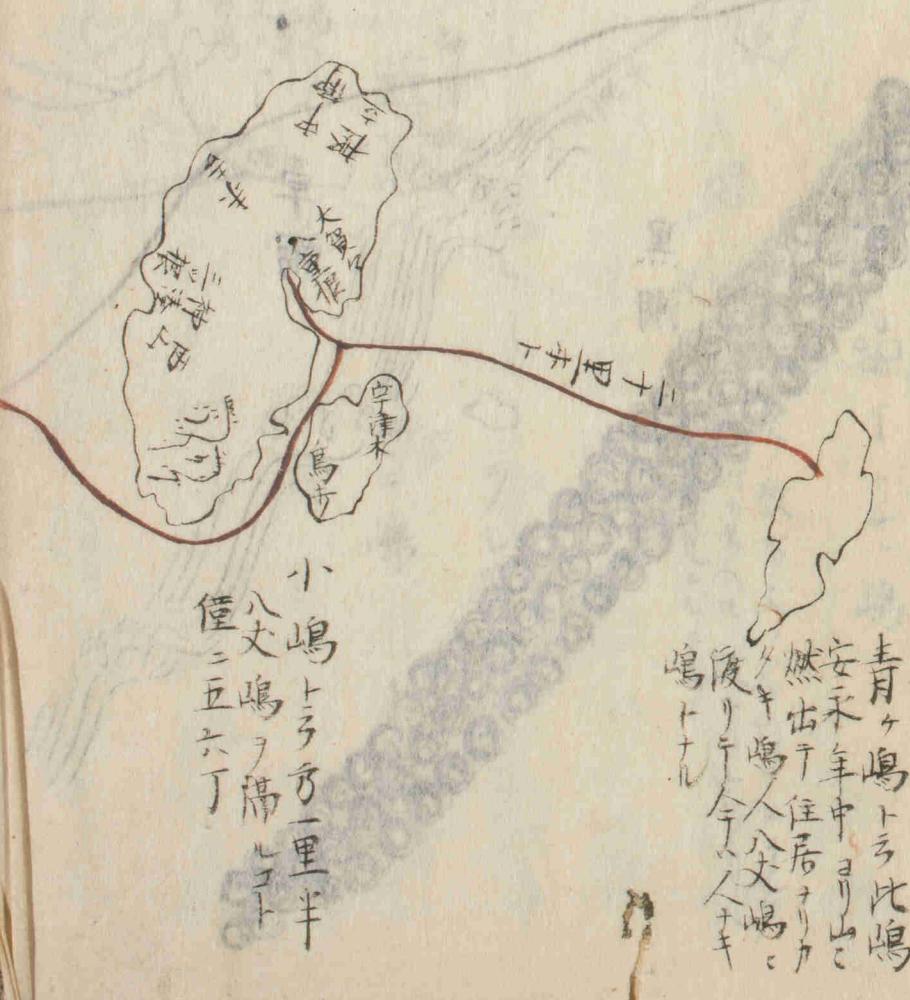
作古方自和子



八丈鳴青ヶ鳴及伊豆七鳴之圖



八丈鳴四里十四五丁ニ二里四五丁
西山ト云高山アリ麓ヨリ貞ニテ
一里余形狀富士山似タリ鳴人
八丈富士ト移安永年中原キ
大ヒニ燃出テ峯落ル其後一上
左別峯ナシ燃枝ニ附大ヒニ下



青ヶ鳴トヲ比鳴
安永年中ヨリ山
燃古ナ住居ナリク
夕キ鳴人八丈鳴
復リテ今人其
鳴十九

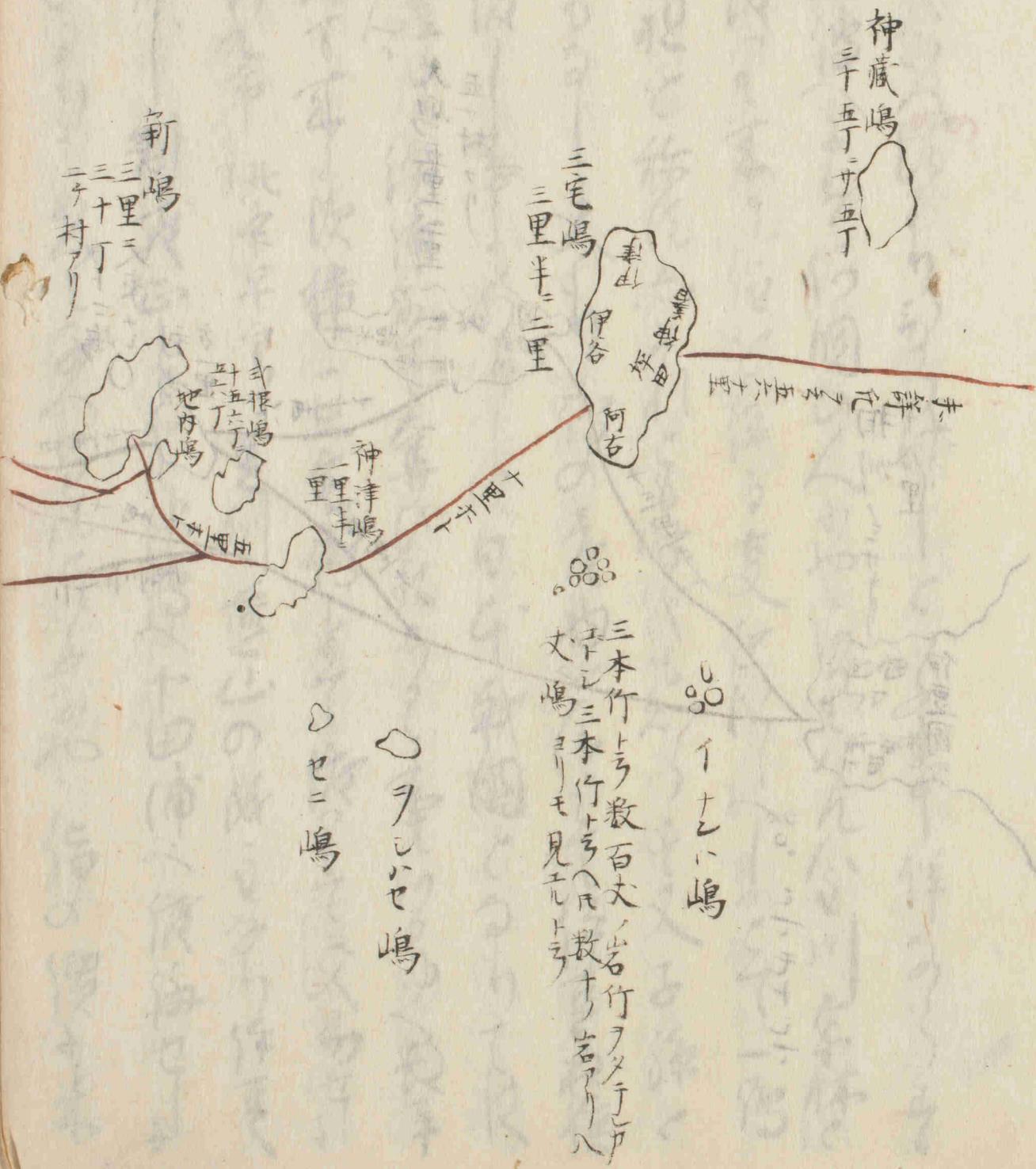
早潮トヨハ幾段トモナリ
高下アリテ潮行龜泉ノ
トヨノ黒潮トヨハ海面黒玉ノ
ヲ流スガコトヨ黒クナリテ
渦定ハカリトナル
右潮行南ヘトル時アリ
東ヘトル時モリテ二丈ナ
ラストヨ

早潮

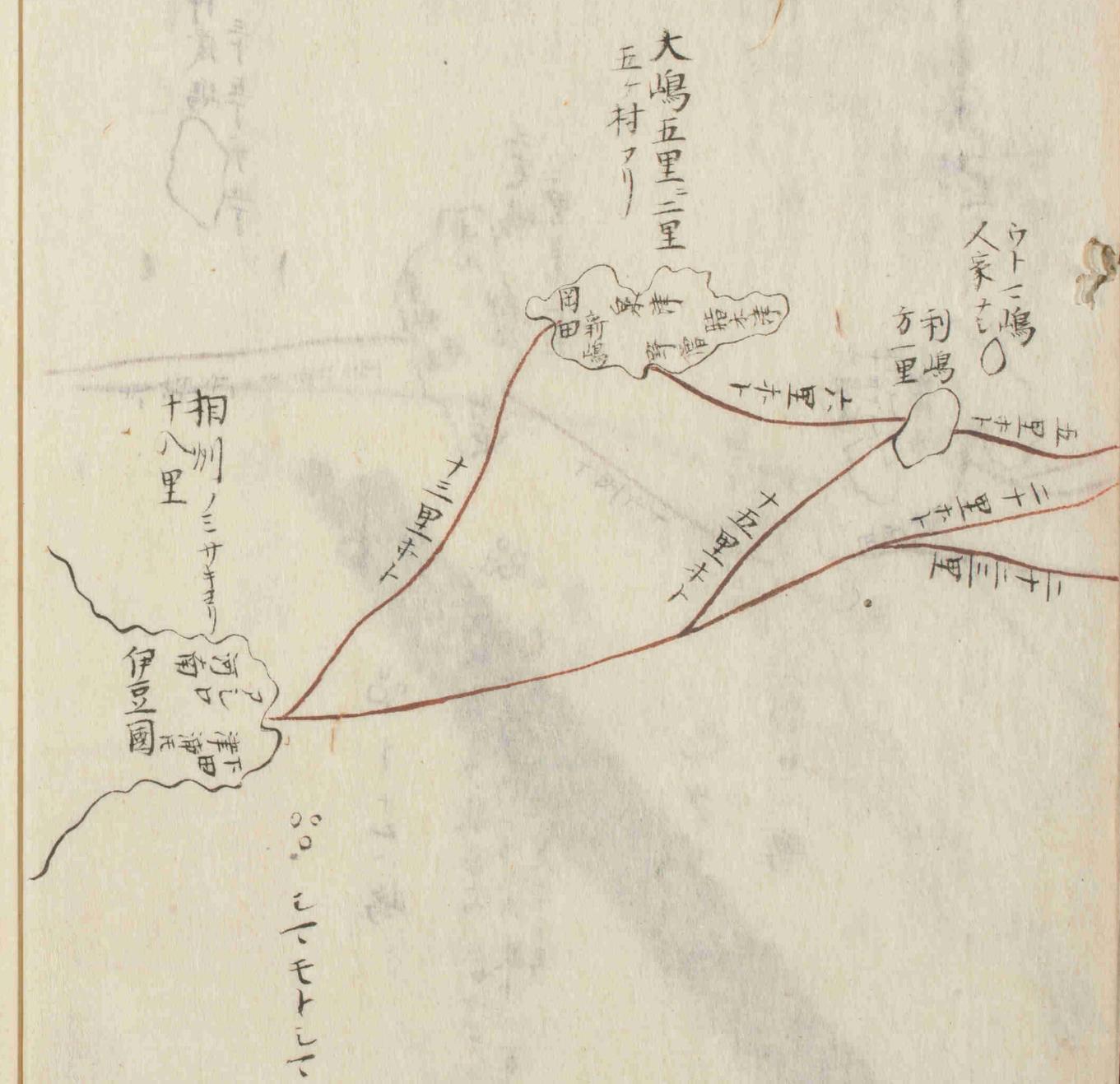
黑潮

八丈革言

島ノ圖



八丈島は、^レ島よりもよけ一と云ふ事詳ゆ
御人の船、すら行國の人やりともん金川家林と
云ふ（波）とまゝ船と縄を支とねて一船
の宮祀と船もあれとも時代も幻とも又子孫と
云ふ事あり。一夫より船の走る所を云うては
久也（波）一事すあり。一に日午年國とくわてには
應に草中、海浦めで、奪ひれらるる事り少く、
の間船て、五、六艘、三隻船まで、波とて、文易せ
伊豆毛九郎、北半早宮、至州、應山の波とすり作
而、處一制、波中すか波、十日浦へ波海せ
中、案多よりもよき事のさんと云ふ也、波の價才



酒をと歎多あへられりともたま候ひてや乞ひや
半歩のトクモ意にてほきの爲也と云つた

既往より也

當代とすりて至州並山代官の文化勅とすりて
流罷陽子や後もあゝ貞の定めをうへる年
御書院のへ後無力せけれども地役へのおじよ
あせられてお仕事の侍もあらずと板を裏
うらをあそび寛政八年石のまぐらとすりて
三高の下ノ君木代官をいた市内附海にうらと
八丈と初作七作張アシカツの入仕の例
貢の制度とす 鳴人と在育アヒタ一セ輩の道を

えよ教訓りうて四年七月東邦を海に登り
寔アサシかくて人物言葉風俗をりと詳アラカルれ
八丈阪海を起ての後罪として凡日半より泊り西
中華朝鮮琉球にまひを付ら後役依役所
ありんとくとも八丈泊めてかとん至州當番
巴キのつりをあつて凡百里とくとも定めあつ
三毛島を泊つては内土のあやうち有りて之程の
日和と泊めされに取ておと出だし三毛島よりある
島アシカツと士六十里とく海國アシカツ半湖黒湖と布なる
前りて早朝アラカルとて幅二十尺をもとて漂流
鷺アシカツのアシカツのアシカツのアシカツ

立いりての少く雷のあらず人まよと本一塊を
消そ黒潮の西向風と相一とに半日も
渴もあり流りきり足筋自性。是と今自古
の歴と人手されど後半にて日和す所れ
日海とたゞやまと早潮黒潮し見て是と見
りの天まそれ、支る所とせよ。方々よんと
よん拂じ若右の仰よりわざれぬまともなく
行流れて東の海よりきゆゑを、餘御入を
見て早潮さしとおもひきこむ、吹風として
日和もとて、是とまん浪波とくら御て事へ
夜をすう内にえどもこれと一日の内を暮れとえ

よきやくはすの吹風すわくとれ、皆と日和を仰
本より多くの人數を多く流人五百隼人地役人
とその事也臣を曰ひ曰ひ曰ひ平氏御使役人
兼事吏兵武家臣内侍平氏子高弟后市口
御先詮半のえ松かみて鷹人の旨と一院人
の支配とあらじものすり
仰用紙二枚せまへ丈九と紙一と音六横七百石接
り紙と紙と作ふと丈丈と紙と紙と丈
テ外す紙傳舟すかと
傳舟セヨ多くらむとよもう三事一四事と三事
事人手す事と手一ちぬられモ也更に發送

モ一筆ノ事を矢計り書とソビセスニキテ
シトモアリムシトモアリミタニ 容兒ヨウリ也の
婦人フムジン事モノアリヤテアベレタリモ見ルハタク
也と引油ヒガシアリサド付キ事モノアリ 肩と腰カツトアリモ
極マツトコトキアリヒキを後アフらわしハ風呂發行
の行ハシ行ハシて少シのアメテシモナキツツのとくに
せされば市後シハシれたり爲ハシにて御下ミツ曾ミツ一色の白
にシ平モ行ハシと儀ハシと業ハシトテス外スル事モノ稀ハシ
多ハシ細ハシとよらハシ業ハシ事モノ肩カツモ也ハシも
蓮津リントク次シ言ハシ行ハシカ解ハシせられり怪ハシトタ見ルて奇ハシ
色情ハシのすハシアリシキ内シ後ハシ華ハシモナハシトハシ宣ハシ

すすり涙ハシ行ハシヒヒ聲ハシとすれどモ凶号
れ色ハシ見ハシぬ人ハシあり安寧ハシと却ハシ波ハシ豆ハシミアハ
波ハシ豆ハシ見ハシ物モノ出ハシれど私ハシとてめる不ハシモ知ハシれ
李ハシ見ハシて怪ハシアリハラ出ハシれて迎ハシキモセハシ一
人のわハシうとどモ身ハシ離ハシて向ハシ曲ハシの山ハシ也ハシ休ハシの傍ハシと
歸ハシ人ハシの行ハシ走ハシすれど人ハシ死ハシうせん人ハシ行ハシそくゆハシア
八丈青ハシ胸ハシの事モノナハシ

益ハシのうりハシ行ハシて娘ハシとソビハシ業ハシ人ハシ恋ハシ男ハシアリモ
准ハシきこハシしりハシおもハシアリモとを准ハシても殺ハシもどハシ中
とく又犯ハシとモセハシて親ハシの口ハシて度ハシトナガハシ

や御身を無く人數少くももの事こすりて
あお平とて寢丈までゆきゆきにうき又確
れもすすりゆくぬき筋の日とよもの、
忍事らむとのれどよきより又されずされ
タアド里、ゆく斗の中にて却ちせよと考へ
稀く乞の支え、ひめの腰がゆること、音がゆるぎ
御とて仰りやまと麦稈解くまてば、猿狹しまま
田子どもをくわむて半すず一、せんじれは
ひの良事よさきにえれやが、行すと仰た事
とよ豆草みて、ぐすまむる事わびに下
引とれ、仰り生えみて、口季よもじくのう

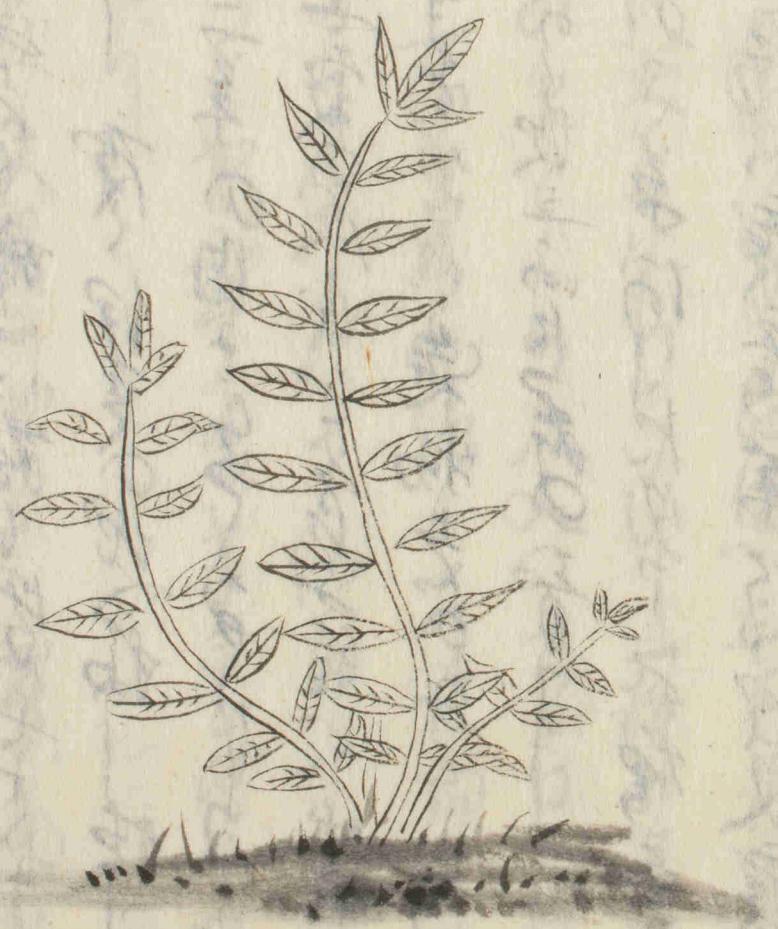
れのやー

トモ草の言

烹玉きこち

えくさ

えくさ



鳴く草叶がれて手の島本とん中はどのへ
木とく中はどのへ、度とて栗をとてて

一日おおきにあつたるをかくす
とて人情舞の歌とどもとくつてひらとどもまき
くわたり別にれ、抱えみすむとく又ゆきよめや
ゆくのとくわざがまよす稀に散む皆七十のす
及の靈廟とくの廟、度、御室の地、御一社と
ちゆく令うやまき二年の日よとくとくよりて此
木枯れりやるとゆき、靈廟の日よとくとく抱にせ
むゆき又ゆき、靈廟とせん送物のゆきを
人多とみてとくをつけてあるとます」
「物の年はたのれと並行たマアと鶴立す
ゆくとて人多と稀、度、御室とよて又度、
也

の呪世草とて、種毛あらじと萬國、三毛内角の角
りぬすと、遠いもみきへ大葉なりと、ひと、一族の年
市に村キねせま、年のこととも、ハスのちよ見入セ
ケレ」と、だくと、すら、すらの、鳥の鳴りて、連句
集、一古をこよのよ、くわぐれ、そしゆく、よをと
きあわゆく、歌といひこや、早て後まうむ地、
河、これば、せよ。

物とて、と度、飛とせぬ、丈丈よせ、と、歌、よと
く、よとく、じつ、と、金、宿、候の、御、年、え、度、わ、と
戸、移、ま、と、云、ゆ、う、文、易、一、お、古、米、支、の
事、房、の、事、旅、油、の、事、の、事、あ、と、う、て、今、清

おせうを全段通じて一事の旨をすら
記さずしよりはよしと申され、右第もさ
弟貴の所宣と一揆すきとゆづるわが弟貴が
心交易してはしまさる事の外信也へまし
りて利欲のうそとあらざりて、まことにとく
ひとときあるゆかうのめぐらしくゆのうえ
じとさんあれ、奴僕にて用ひき者、口汚れを
棄するもあれば、他をもよね奴僕として遣すをす
方をもじり、もう居てもうへわれを瘦痺とて遣すをす
く彼ももとてせ度もあつて、可いども、人ぞれを
いぬ原めにて、すむまじき筋、瘦痺とて之に

死にに至り疾す。やのねうるれ瘦痺とて事
と云無事と忌みゆえられども其方天國へ行せり。女命
主御子陵す。

利未亞利のゆか拂里國とちりと、其のく屬すと
他の奴僕とて、いとも、志らひの筋もうち拂里國の
と復もく實見てありとてハナレヒミキの主とて
あすねとて、傳てゆる處へておお金(中)に唐
の沙翁ナ太寺の法事相場のめに、おれを流人二名
とて、物入り孔ぬる事、一まん後發前を流れ
一派人の子弟とて其外、眾もとて之を流人帳
に記して、有り一株やとよすよ身すら見え
文多式、醫師或画師また書生とぞ立ち若

われに傍人師にてやうとあす板打ハタがや先
物モノのて妻フミとお事ヨシ、自由リモされ因ヨリえしより
手ハタハタよわて強カタキカタキらひ、ひゆせヒヤセよめ
は戸ドアとて名メイるに使ハシマツル客ゲスト金カネ者モノと云ハナシるよほ
とやうて物モノのほのすも見えヒツクるのち改ハシメるも
れよひくわ多くて殺スルはむそとへり流フツけるのを
きのこすておうり流フツ石イシの本ハコひみて物モノとて
めうとう一辭ハタハタある。よひ歴又用ヨウもうる。よひ歴
内ナカニとて此コト年イニまで是シテ事モノと幻ハタハタにほんがうド丁トを肩シラ
に勤ハタハタきことの品モノと後ハタハタとゆう物モノあてもじとうゆかと
き。傍人ハタハタの歌カタカタとくとく辭ハタハタせめすあらや

中ナカニとて此コト年イニまで是シテ事モノと三辭ハタハタハタのくにあととうを

第八節と云ハタハタれもくわ降ハタハタせまくはりとくら
や傳ハタハタ田ハタハタ野ハタハタの件ハタハタすあねもか賣ハタハタ假ハタハタ假ハタハタの事
めハタハタにひきとくす三ハタハタハタあともくわ意ハタハタの事
すと云ハタハタ假ハタハタの江ハタハタ店ハタハタの事ハタハタもとて書ハタハタ詔ハタハタめ
ちハタハタあわせハタハタ假ハタハタたつて書ハタハタかある流ハタハタ人ハタハタとく
ゆハタハタとくとくしまたもくわにれハタハタ傳ハタハタ人ハタハタとく
考ハタハタのうとく海ハタハタとく事ハタハタとく一ハタハタ度ハタハタとく仲ハタハタのも
流れ大ハタハタ奥ハタハタの傳ハタハタとくみよみて人ハタハタ殺ハタハタとくとく
ありすハタハタ

八犬傳ハタハタと幼ハタハタうりの傳ハタハタも八方ハタハタ散ハタハタす丈ハタハタ景ハタハタ
喜風ハタハタと建ハタハタうとくされ、うとく風ハタハタと風ハタハタえれま

授與まで猶とす。ものへ丈柄の手筋を
ましまる。腰の扇あく曲といたれり。おきて、
入りかへは是が一箇うて、画さんばよおのも
見れぬ。物語りた海女は猶も身取坐て筆也
とて自ら三面の曳き。お後ノ中と武
官の者とて押所。日午の押所。日午のあ
鳥せんことて、いんじゆく。猶子とも
八丈鶴毛。猶十鶴米三鶴。人の筆者。向う。他方
より。又反の板。また。日午坐てひ左。一。高
次而三席坐て。母。一。地方。また。母。
小童。と。ひよトアトウ。ハラタク。うす。おら。のよまと。

嫡男とクロ二官とジャウ三男とナホウ四男とシヨウ
官とゴモ太官とロウセ四とシツテヤウ。八官とハツト
ヤウ九官とクウロヲ。嫡女とちニセとナヤ。三女とテツ要
とツズ。あとシズ。こじなセと。ツズ。レセと。大ズ。セヒ八女
九女とチズ。ぐく。こじなセと。ツズ。レセと。大ズ。セヒ八女
或に親の名。又。あの名と並んで。他の名。他の名と
事。人。の名。また。ラウラウ。と。ひ。父。母。多く。もう。ひ。ラウ
は。お。我。ち。父。ト。お。く。り。て。は。ト。ラウ。と。皓。て。是。も。お
そく。お。う。く。こ。ら。シ。ラウ。夜。お。う。う。す。お。ま
物。お。う。く。の。ヘ。イ。ア。イ。ウ。こ。も。か。お。れ。お。ひ。お。ま

物をしおつとてお風呂をすこしもいじ
ゆで貰ひ人御子すら生れ、人を教へてあらめ
歸人をとせぬ者も居て、人を見えず人をもて
身をきく征みき物をもとむやわれと爲てくわ
とき、希にもくまく事をする物とて、原とイドかう
かうと縛りイド本のうさごううさうやせんやま
せあとよきとモウシケイレシナウ。シモウラヘイド
シナウとひ種をやりけふととをあわせ天送
くことおれども流れて夜に生きてあわせとぞ
すあまのまつてゆき、あれども鷹の肩をあわせ
川原を風へりとくらむのりとて八丈言葉をうる

とげくてうそまうのふをもた

八大ひ門はくのみ

他あめうて。奥と本あめ。よよこてこの。
のせとて、おひづり。お夜に長きりん
れぞううれあみてひづりの。めあくへそくづ
らなき。あそびにめひもれとくめあひぬ
きのね。きめくわく、くらぬもくれ合ひて
え夜のみ。よ。よめもひせ、あんせひ
ゆくのうじよとくに、無ゆくとも

八丈言葉を数多めて江戸へ出でるを度のと
うとくのとく、公儀よりと外事と数多附て

せひそれへ下へへ反掛せりと上昇の爲なり
而用の外にててす。數多の婦人が業つて其處
も日も往と來る事せし。猶まわ作袖ふく
ゑ。シヤガ今サントモリシムハ夫鳴よりシテ
トモアニル年ノアノアノ

氣れ事もあや内れ候侍の女實筋ともだす
也。鶴の皇朝、其事は後づ侍の向く也。の者いを
の眞みさゆる官事かく歎咲ほよりて、こゝか
い鶴真と海老の意と海龜に比べて本よりま
ず。是れを嘗ひうるひゆき、お二間もより
大奥とて対はとまれた御祝、其事ナリと云ひ
也。

鶴の歌うるやうと詠う年、それも歌て飛
出所の遠や地との詠うとくす。まよす
まよ夢のたれされいゆき詠うとくして、まよう
しゆゆめり詠うとくす。秋すれどくゆう
里そつむとくゆく吹音とくす。鳥鳴多く歌是
丁鶴猪口ゆて人を飛れてと号され。羊の歌
きくこと。そのとくものとほ鳴よひ。す。詠うてまよ
突て取らゆふきちのねゆうに。詠うてまよ
み。序がゆの味い。也と云ふて何へ。歌は
年三高年、足のうへ

物の年。足の年。足のうへ

戰鬪角の外、牛馬を幼子一頭てすせん角に
いたる者有りやむかへ、ひそむとぞもりま
猫とせひゆうてぐ、常犯われも辛走やせよのね
こそ、いふくぬやく毛にさわの吹触と取豆皮
うづき三の年の也云とき。又

家福ま長、下寺とらニテま降古家坐て妻家
出處とらと、坐て妻家新坐て妻家せれ、後日
又きとくを殺り、セアとて出處されにす。難能
ぬは、これ先祖の血脈もすらためつてのやうで
ま弓の時、即ちよりよづけと賣て口と糊とも
のとされ、世の中よき白賊實らとゆあきもの。

長年ちに上名セテ先に宿念以すすれたり
と御ひ水をときてその樓つを建えん中まを
のめひゆうと中華ノ製瓦門と建る見付度
國物ノニテも事自と通し計より華ノと後
公儀もりを傳ヒテ詮ひ一とア

考へ三十年の間とせう販異國の船流れ亨る
中も度て先かども言付西せられ、傳くも取
のとされきみじのれ、うくのそれとす
内うちとてゆりすむらとの重ねうち所
之へ次ラ傳ナリ、梶石也ゆこのとわゆ事
すらか三つの中に歸人のからせて小窓を抱き

觀者ともりしと見え大ナセす斗アリゆ
ううるて桃毛石とよ上品とてや、御刻一ても
手を空すき、ゆすらはる、朱一石と價ナヤてお
迎げたと目利セテ人ゆて耶、痕家の念一佛
モ、したとよのすと、うそとおてゆ、一耶、痕
家園の私とよあ、や跡、ハ文門も有と、ね
の前什とをくと、凡事、夜、有つて
舟客の後うちも、中と、以て、也すの秋季
のこと、蔓の、よ、蔓の、御、て、け、く、の、次、傳
日、帰、と、だ、き、方、う、ち、う、と、蔓、と、と、
傳、見、和、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

久之うちあり海とより新の天とぞる事
も夜こよどと

鶴ノ岩とよ豆本の、歌たのや



高サ丈もすまく木理望て呂くねりて

雅ナリ或人云の鉄刀樹ナリと云天皇是ニ有ル
の事と見れ、故本ナシムと教く画々これハ
天皇モ生シラムとの印相也又シタシ木を
取たのア、ナリナリと人シダ



ちや奴丈よりい葉、根柢草すに大さきを
意の内八面をうら見てすと、柱て寂との情す
右のす本じ一もりほきへぬ一柱りとソム付
せん共夜三面は牛ぬ樹ともにぬゆくと然す
木の乞樹數めとて末寺せと庭を地了て
革店よりよのとくひよ見じ中風のめ革とテ
西山に宿中のうちどもてちや一里半、おま所ゆき
白山の鷲と見風景のゆうに高きのすよ
五井門の海え見^えな山の黒すわと、波、走る鳥
小鳩八丈と誰りと事口たて斗内道の文鳥
法西の帝の娘の社のゆる銀眼神と号トハ今
の

度々神とわ、じ神獣と萬也虎ら祐と称
云漢もち米二志をしてる為相のう具足あつまう
後世に掛りひと見へ角よしてゆき一分子
左のゆにわに腰のきれく、筋すとても鳥
と見くは猪すと云鴨（ひよ鴨）もぬ銀神て
小鳩一頭くれてたぬぬよへよきわるキと考
みみすまし鴨くよ波モハ文鴨よすりて鴨人
名れと伏たたらく、小鳥の字津本と云ふよ
近せり、詰めのこく床ア震やすとし鴨人とい
ふとくう川の邊、波りとて惡風震され
ふとくう流沫國カツル交が早てしら取られ

こちひつゝやゝて琉球國に上りてとみて
うち後をかく次よりもよむの想の假令
はまはと建主との事と考へましとす
のと外詳かく次の船内に假令に之達
もさきあくまでも船の歸人の絶滅すよ
きのみ行ても。そつらもくにゆせれ。もくらく
くらうごとくらよう。ラウサひさゆく
ラウサひざめ引のくもゆく
まなび安永年中とく燃生て近若す
内人猪にへ丈(波)まで結伴して畢竟
人數男をする(口)歸へ三十余人ゆく
人

白海より出くたる人ねぬ度もくや琉球
國の歸人ゆとす。實にとるやと近若す
をまこととて船内をア鳴八丈の假人を假に白海
の内小笠と鷦鷯(波)を右の内取くゆと
ほどのせ八年の文書(原流)たる事ゆ
あと乞一時て南方とゆがうてめど莫一も
いとせ。半われぐに假もあうとけあもそれ
とも言候解せざれ。假ゆをさうもすり
紙よき物ゆすと車びきく(海)とくまのゆ
ゆの次内石方日百里の大洋百多の雷の内
やくらもく次天とあとのづらうと坐一而ま

白山の山と云ふ年沙宮宿後山のまへ追
坂のんとて井宿と出帆めよすれどもれ
さへに運うて車ひ廻るがれとゆくは
やまのやまとやもわんと傳へり
八丈より風土と見りてきての時天子すむと
良のやとて走らざさんとよのじとよ
ちを傳ゆるとかく

首へはま七八泊され疏景陽子から八丈三宅
新修水三郎のまた足られ景の將主と依
を西ゆるか内主と云ふ二郎の爲人百里人三宅
内に住むの傳へり度く故海主が内主と云ひ

解へや、父へり猪野をもす) 猪野に牛馬も
ゆきよ牧場のてぬとを次口知むのと漢歌
じよ先年水鳥のゆくらのを返れすりをま
因ゆく洪水或い海邊まで流れ出大浪すり
すり言語うけまし頃一巻を半もすすす
よじと解へり猪野を見れば、良材とて金
の入一木を安ら割り地石の木とまぐれ
年革所多と安置して傍人革所と称
英一蝶(けつ)流す廻書の画と(年また多
うすとにて人世もせひぬくとて拂じ歸人
のまやかひて画手一はせ絵とおぼす

の見ゆるの日と數うて三十日草よ草

丈の板と画猪れ

神鳥鷹と云、三足八丈の向きて三十日草よ草
の丈とそりの内へ而昇度とて承ひよされ
を傳へ國うんとすよたに承ひて思付けまふ
のうすく海にさかねりとあて思ひ承はまふ
のめらぬは又思て承ひてあてをす
事かばにれて山あらばね枝の木とある
をよせたるがへれるあいのね枝の質日半
はよもよじ中華東國よりきたるところ

御教はくに才能すみてなき、仰て是の
金を用ひ方々に之にて、米酒とゆて一年中
用ひまむの心の厚す實相へ接りあひ
合と仰て公議へれども、ゆゑに安き事と
以もえの境人の便(きみ)あらゆりてね枝休
生とよはつき日和と見定先主を仰て接し
八丈の板と並て、いと重き事あり奉り、さて
世界の中といふのちゆのて、一村の勢難
人として、いと大事もありてめにや外
の物にやてのすきよすきされ、筆を止

右に八丈の板とけ支能ひて作

ノ後又於此一三河口半共度海來國次第
那須田向日別郡用度見立にて焉と云
所村へ下向ひ予のうて石井せ十年の計
せ側に有りしも行れしのれと取八丈船
半治の内治事跡を詔と承せて紀主よ
于特寛政九年丁巳の仲夏三河口の旅
宿天保村少佐由是にあひて七十二歳古河
松軒居志

右以記其年之不無模也早

惟特文化丙辰年三月十六日は直方

